

強化的なかかわりが子どもとイヌにもたらす効果

The effect of mutual reinforcing between a child and a dog

高山 仁志

Hitoshi Takayama

立命館大学大学院応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words: 正の強化によるイヌのしつけ, 飼い主・家族支援, 行動的 QOL

問題と目的

家庭で飼育されているペットのイヌに対してなされる「しつけ」「トレーニング」は、「イヌがヒトと共同生活を送る中で、何らかの問題を起こしている、あるいは起こす可能性があるため、それを解消する」という目的のもとで行われる(高山, 2015)。問題の中でも、「家族に対して噛む」といった行動は、重大なものと考えられる。

そのような問題が起きたとき、矯正の対象となるのはイヌである。「飼い犬に手を噛まれる」ということわざもあるように、イヌは主を噛んではならないのである。問題を示したイヌへの対応としては、重い罰を与える、サークルなどに閉じ込める、他者に譲渡するなどが挙げられよう。しかし、「コンパニオンアニマル」という言葉もあるように、いまやペットとしてのイヌは、「ただのペット」ではなく「伴侶動物」「家族」という位置づけにある。そうした「家族の一員」に対して、一方的にイヌの行動をスポイルするような対応を取りたくないとする飼い主は少なくない。そこで本研究は、「勉強中の子どもに対して、攻撃的に強く噛むイヌ」に対する実践として、一方的に行動を変容するのではなく、子どもとイヌ双方にとって強化的なかかわりを成立させ、その効果について考察することを目的とする。

方法

オスで3歳のトイ・プードルとマルチーズのMIX犬(以下、対象犬)と、小学三年生の男児(以下、男児)、およびその母親(以下、母親)が対象であった。

対象犬は、男児がテーブルで学校や塾の宿題をしているときに、男児が椅子から降りて歩いたり、「ママー、ここがわからない」といった声を挙げると、足やお尻のあたりに強く噛みつくという行動を見せることが多かった。また、他の場面においても同様の噛みつきが起こるため、対象犬は基本的にサークルの中に入れられている状態であった。

そこで介入として、テーブルの上にドライフードをあらかじめ用意しておき、勉強中に立ち上がる際は、それを母親が男児に手渡し、男児はそれを対象犬に見せながら歩くという対応を提案し、翌日から実践してもらった。

結果と考察

介入初日から、勉強中に噛まれることは一切なくなり、男児がフードを見せながら適切な対応ができるようになった。また、男児が細かな行動や対応が苦手なため、介入当初は母親がドライフードを男児に手渡し、イヌに見せるよう促すという援助を設定していたが、途中から男児がドライフードを持つことを忘れても、イヌは飛びついたり噛んだりせずにあとをゆっくりとついていくという行動を見せるようになった。

他の場面での噛みつきについては、母親の報告によればだいぶんとましになってきており、仮に噛んだとしても以前に比べれば非常に弱い噛み方になっているとのことであった。

本実践は、①「援助付き」で「正の強化を受ける機会」を子どもとイヌ双方に設定し、②それまであまりなかった「子ども—イヌ」間の強化的なかかわりを増やし、③子どもとイヌ、双方の「できる」を「いま、ここ」から拡大することを目指したものである。援助付きであっても、正の強化を先送りすることなく、イヌと子どもが互いに正の強化を受ける機会を設定すること自体に、何らかの効果があったと考えられる。

問題のある行動を示すから閉じ込める、あるいは問題行動を減じるためだけの対応を行うというのは、非常にリアクティブな対応といえる(望月, 2001)。また、そうした対応に終始することは正の強化を受ける機会を先送りすることになる。そういった目の前の問題解決のみ終始するのではなく、イヌと家族双方が正の強化を受けられるような実践を行うことが、対人援助職としてのドッグトレーナーに求められるミッションといえよう。

引用文献

- 望月 昭 (2001) 行動的 QOL : 「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究, 6(1), 8~17.
高山 仁志 (2015) 正の強化で維持される「イヌのしつけ」についての考察 対人援助学会第7回大会ポスター抄録.